

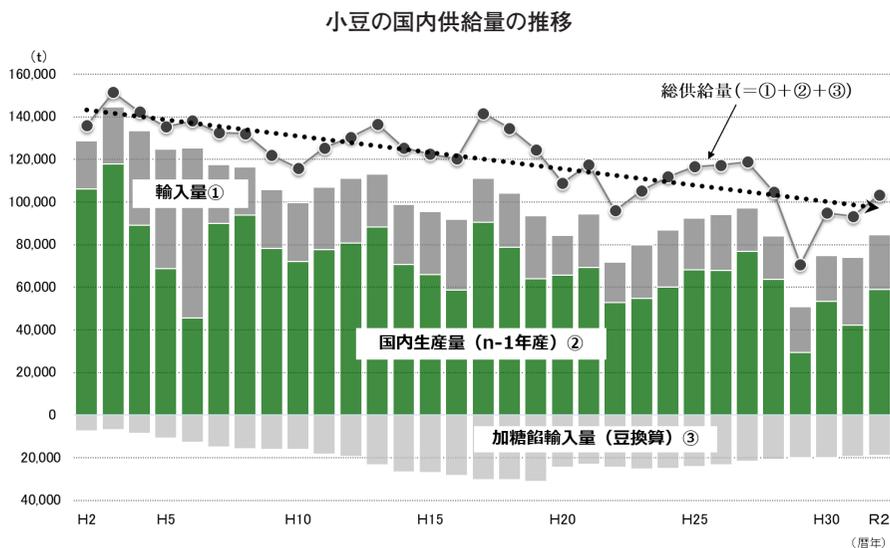
小豆の需要動向について

農林水産省農産局穀物課豆類班

本稿から数回にわたり、小豆に関するデータを取り上げ、現状と課題について改めて整理したいと思います。

まず1回目は、「小豆の需要動向」についてです。

次のグラフは、年ごとの小豆の供給量の推移を示しています。小豆の需要に関しては、統計データがないため、加糖餡の輸入量を含めた国内への供給量ベースの数量（小豆の国内生産量、小豆の輸入量、加糖餡の輸入量（豆換算：輸入量に1/3を乗じた値））を年ごとに積み上げています。



(注)「加糖餡輸入量(豆換算)」は、「調整さげ腐又はいんげんまめ腐の豆(加糖)」(統計番号:2005 51-190、2005 51-191、2005 51-199)の輸入量に1/3を乗じた値。

(出典)国内生産量:農林水産省「作物統計」、輸入量・加糖餡輸入量:財務省「貿易統計」

小豆の需要（総供給量）は、長期的に減少傾向で推移しています。このうち、加糖餡輸入量については、平成19年まで増加傾向であったものの、その後減少に転じています。今後、令和4年4月の加工食品の原料原産地表示制度の完全施行を控え、輸入加糖餡から国内製造餡へ切り替える実需者の方もいらっしゃることから、加糖餡輸入量は、更に減少していくと見込んでいます。

さて、小豆の需要が長期的に減少していることは、関係者の皆様の共通認識となっていると思います。では、この小豆の需要減少を食い止め、維持・拡大していくためには何が必要かを考えるため、需要減少の要因を改めて整理したいと思います。

小豆の需要減少の要因については、様々考えられますが、食生活の多様化等に加え、供給量・取引価格ともに不安定な小豆が食品メーカーから食品原料として敬遠されてしまった面も少なからずあるのではないかと考えます。

なぜ、食品メーカーが食品原料としての小豆（餡）を敬遠するのかという点については、食品メーカーを取り巻く環境の変化と関係していると考えています。以下に、環境変化の例を挙げてみました。

- ①**食生活の多様化**…食に対する消費者ニーズが多様化しています。こうした中、食品メーカーは国内外の多種多様な食材から原料を選択しており、食品として出回るためには、多くの原料候補の中から、小豆（餡）が選択されなければなりません。
- ②**消費者の食品購入**…近年、大型スーパーやコンビニに加え、ドラッグストアでの食品の販売額が増加しています。こうした業態では、一般的に同一規格の商品が大量に広域流通するという特徴を有しています。
- ③**製餡メーカーの減少**…供給サイドと食品メーカーを繋ぐ役割を担う製餡メーカーが年々減少しています。食品メーカーへの餡の供給者である製餡メーカーの経営は、主要原料である小豆の取引価格の影響を大きく受けます。
- ④**食品表示制度の見直し**…近年、加工食品の栄養成分表示の義務化（平成27年4月1日施行）や加工食品の原料原産地表示の義務化（平成29年9月1日施行）が行われました。食品メーカーにとっては、包装資材との関係で容易に原料（産地）変更しにくくなる面があると思われれます。

食品メーカーが接しているこうした環境変化の中で、各メーカーは、これまで以上に、①魅力的な原料を、②（質・量・価格の面で）安定的に調達すること、を志向されていると考えます。このため、小豆の需要を維持・拡大していくためには、菓子類等を中心とした既存の需要を大切にしつつ、こう

した実需サイドの動きに的確に対応していかなければなりません。

他の原料と比べ「魅力的な原料」という点については、各メーカーの立場によって様々な評価があり、主観的な面があるため評価が難しいところですが、小豆（餡）については、古くから日本の食文化に欠かせない存在であるとともに、最近では洋菓子やスナック菓子を含む幅広い用途に活用されているなど我々の食生活に欠かせない食品であり、その機能面も含め変わらず魅力的な食品であると思います。このため、引き続き、この魅力を伝えるための取組を関係者で取り組んでいく必要があります。

一方、「安定的に調達」という点については、実需者の求める品質・価格帯の小豆（餡）を安定的に供給可能な体制を早期に確立し、食品メーカーが小豆（餡）を選択し易い環境を作っていく必要があります。

なお、食品メーカーを取り巻く環境として、SDGsに取り組む食品事業者が広がっていることも挙げられます（<https://www.maff.go.jp/j/shokusan/sdgs/index.html>）。近年、環境・社会・ガバナンスに配慮している企業を重視・選別して投資する「ESG投資」が急成長するとともに、環境負荷の低さや人権・労働環境などの社会問題への配慮を取引先の選定や購入の基準とする「持続可能な調達」が広がっています。豆類の業界におけるこうした取組の広がりや、こうした取組が需要面における影響等については、引き続き注視していきたいと思います。

以上、これらの現状認識や課題等について、関係者の皆様から広く御意見等いただければ幸いです。

次稿では、「小豆の生産動向」に関するデータを取り上げたいと思います。

（以上）